

董康『書舶庸譚』九卷本譯注（六）

芳村弘道

〔書舶庸譚卷七 民國二十三年（昭和九年、一九三四年、甲戌）一月十五日（一月二十五日）〕

十五日

晴れ。朝、小林の處からぜんざい（原文「赤豆沙煮糰子」）が届く。今日が元宵節に當るからである。陽曆のため月の満ち缺けは分かりやうがないけれども、昔の風俗がまだのこっている。十時、倉井がやって来て、小林とともに裁判所に出かける。控訴院長の久保田美英と地方裁判所検事正の三橋市太郎が迎え、民事・刑事の各法廷を案内する。法廷内の配置と訊問制度は、おおよそ我が國と同じ。ただし特異點が三つある。一、調停室。この法律は發布されてすでに數年になる。圓卓を用いた會議方式で、判事一名が中央に座り監督の立場に就く。左右の調停員二名は、判事によってその職權をもって指定される。この職務は資格を有する者を選びこれに充て、各分野すべて揃っている。そのほかが雙方の當事者の座席である。凡そ債權額が千圓以

下の場合、もしくは商事および家産による紛争の各事案は、金額の多寡にかかわらず、みな先に調停手續を行う。その利便が二つある。一つは最短期間で正しい結果が得られ、訴訟が長期に亘って實際は損をするということにならずにすむ。今一つは雙方ともに勝訴・敗訴のしこりから起こる心の傷がなくなる。この法律の運用が奨励され、實績は優良である。昨年の數を計算すると、商業關係は三百餘件、債權は九百餘件、家産は千三百餘件で、總計は民事より少ない二千五百餘件である。相續・婚姻の事案はこの範圍に入れない。しかし申し出をする人がいれば、審査に加える。二、陪審制度。専ら陪審員に證據を調査することが任される。ヨーロッパの陪審と名前は同じであるが實態は異なる。三、思想犯についての檢事取り調べ室。これは共產主義事件について、特に専門の名前を設けたものであり、政府の防備が嚴密であることを示すねらいがある。お二人はとても親切で昨年の各種統計表の冊子をくれた。

お別れをして、狩野〔直喜〕宅に行き、とどまって晝食を戴く。コロタイプ版の殘本宋版『禮記正義』二冊と古寫本『春秋正義』一部を

もらい、嘉靖本の黄刻『水經注』一部をお返しにした。狩野が清代の刑部の現審（八旗の戸口と田地家屋の訴訟）と秋審（死刑執行制度）のことについて質問したので、経験したことを逐一告げる。狩野は初めて聞くことであると不思議に思い、『大清會典』にどうして記載されていないのか」という。私は、『會典』は、もとより王朝の法制を編集したもので、各國の法規大全のようなものである。法制内の故實や變更については當然、詳しく書くことができない」と答えた。狩野は私に『東京夢華錄』にならって書きとどめ、今回の講演録の後に附録するよう依頼したので、私はこれを承知した。狩野に別れ、京極に行き紫式部の人形を買う。また岡野兩替店に行き、買ひ物代として數十圓を兩替して宿に戻る。同行者と東山を遊覽し、足跡を印し遣して行った證にするつもりであったが、すでに宵闇の頃となつてしまひ、たいへん申し譯ないことをした。夕食の後で小林の家に行き、彼の母堂および家族の者とお別れをいう。

十時ごろ、オランダ人の細部安郎來談。この君は唐代の法制に詳しい。彼の話によると、中國にいた時には東方税關の試補の職に就き、そこは中國では漢務部という名稱であり、「賀思培(He Sipei ホスペ)」と名乗っていた。日本では和務部に務め、「細部」の二字の訓讀が原名と近いので、この名前に改めたという。思うにオランダと日本の通商は明代中葉に始まり、歴史上、この職務が存在している。ただし實際は外交機關の學習員であった。唐制を研究するのに参考すべき書籍を私に質問したので、知るかぎりの全てを擧げ答えてやり、唐人、例えば孔穎達・賈公彦などの經典の疏によく留意するよう言い聞かせた。

なぜなら昔賢はその當時の制度を用いて古典籍を注釋しており、例えば二鄭（後漢の鄭衆・鄭玄）の注にいう「今律」は「漢律」であつて、孔穎達などの疏にいう「今律」は「唐律」であるからである。また摸寫本の『周禮』鄭注は名手の書であり、『尚書』の某篇の疏に引用された唐制は甚だ詳しい。これはその一例であると説明した。細部が歸つたが、日本圓が中に入った財布を一つと、日記、書目などを忘れていたので、手紙を書き添えて旅館の者に届けさせた。

鳳凰臺上憶吹簫

【原注：題紫式部小像。所著源氏物語爲和學最高深課本（紫式部の小像に題す。著す所の源氏物語は和學の最も高深の課本爲り。）】（一）の部分はずべて原注、以下「原注：」を略す

宮漏移磚 宮漏磚に移る

衣香題句 衣香しく句を題し

【衣衿遍書和歌（衣衿に遍く和歌を書す）】

個儂翰墨翩翩

個の儂は翰墨翩翩たり

奈羅敷花艷

奈せん羅敷は花のごとく艷にして

青女霜堅

青女は霜のごとく堅きを

本是迎陵俊侶

本是れ迎陵の俊侶

鬢天恨語入哀絃

鬢天の恨語は哀絃に入る

妾心似盈盈古井

妾の心は盈盈たる古井に似て

不被風牽

風に牽かれず

堪憐

憐れむに堪ふ

仗湘管一枝

湘管一枝に仗りしやうくわんいちし

揮灑年年

揮灑すること年年きさい

比絳芸選夢

絳芸の選夢に比ぶればかう芸のせんむ

滕薛誰先

滕薛誰か先なるとうせち

【相傳情節類石頭記（情節は石頭記に類すと相傳ふ）】

此是三朝實錄

此れ是れ三朝の實錄

重雞林爭解囊錢

雞林に重んぜられ争ひて囊錢を解くけいりん

且博得

且つ博し得たりか

然脂人麗

然脂の人は麗しくぜんし

爲作長箋

爲に長箋を作るなま

【某女士解以現代體（某女士、解するに現代體を以てす）】

鳳凰臺上憶吹簫

【紫式部の小さな人形に書き付ける。その著書の『源氏物語』は、日本古典の學問の中で最も程度の高い難解な教科書である。】

宮殿の漏刻は時間の経過を示し、敷き煉瓦に映った日影が移ろいゆく。衣からよい香がして衿には歌句が書き付けられており【衣の衿いっぱい】に和歌が書かれている【、彼女の文章は優美である。羅敷の容貌は花のように艶やかで、青女の貞操は霜のように堅く、二人と同じ美しい容貌と心ばえは如何ともしがたく世に目立った（後掲「紫式部傳」に見える式部が「婉順にして淑良」であったことをいう）。もともと妙なる鳴き聲をもつ迦陵頻伽の鳥の優れた友というべき身であり、

持靈天において抱く恨みの言葉が悲しい絃樂となって奏でられるがどとき物語を著した。「わが心は清く澄める古き井戸水のごとし」という古歌にあるとおり、貞節が堅いので風に吹かれて引き寄せられることはない。

【源氏物語は】まことに愛すべき作品である。湖南産の竹で作った一本の毛筆を頼りに、毎年、自在に書き進められた。絳芸軒での夢の中で木石の姻縁を選んだ物語（『紅樓夢』）と比べると、春秋時代に滕と薛が長を争ったごとく、どちらの作品が優れているであろうか【『源氏物語』は、情節が『石頭記（紅樓夢）』に似ているといわれている】。この物語は三代の實錄に基づいており、唐の白居易の作品が新羅の商人に重んぜられたように、人々は争って買い求めていた【この物語は、ヨーロッパではみな翻譯本がある】。また麗しい女性が燈をかかげ、この物語の長い注釋を著す【某女士がこの物語の現代語譯を行った】ほどに人氣を博している。

附紫式部傳【『大日本史』（卷二二四）本朝烈女傳を譯す】

紫式部なる者は、式部丞の藤原爲時の女なり。右衛門權佐の藤原宣孝に嫁ぐ。式部、資性敏慧なり。幼時、人の讀書するを聞けば、輒ち能く暗記す。爲時甚だ之を愛す。常に之を撫して曰はく、「恨むらくは汝の男子爲らざるを」と。長じて和歌を能くし、博く和漢の舊籍に涉り、兼ねて朝廷の典故に通ず。時に上東門院【名は藤原彰子。一條天皇の中宮にして、藤原道長の女（『大日本史』にはこの注なし）】、方に詞學を好み、婦人の才學有る者を選び、引きて左右に置かんとす。式部も亦た寡居を以て之に仕ふ【『大日本史』は「式部も亦た時に焉

に候す」に作る)。上東門院、『白氏文集』を讀まんと欲し、式部授く
るに「樂府」三卷⁽¹⁶⁾を以てす。上東門院の父の道長、其の才色を悦び
て之を私せんと欲す。式部拒みて従はず。『源氏物語』五十四帖を著す。
醍醐・朱雀・村上三朝の實錄(『大日本史』は「事蹟」)に假托し、空
に架し虚に憑り、結構は精妙にして、古今に度越す。後人、箋注を下
し疑難を釋き、一代詞家の宗と爲す。一條帝讀みて大いに之を賞して
曰はく、「是れ善く日本紀を諳熟する者なり」と。人之を呼びて「日
本紀の局」と曰ふ。人(『大日本史』は「人と爲り」)、婉順にして淑良、
己の長ずる所を矜らず。其の謹慎持重の大略は、著す所の日記に詳し。
女有り、大貳三位辨の局と曰ふ。

- (1) 大正十一年(一九二二)十月一日の借地借家調停法に基づく借地借家
調停から始まる。
- (2) 東方文化學院が昭和五年に影印した現存卷六十三から七十の宋版單疏
本の『禮記正義』、同じく昭和六・八年に影印した影鈔正宗寺本『春秋正義』
三十六卷を指す。なお後に前者は『四部叢刊』三編に、後者は續編に再覆
製された。
- (3) 明の嘉靖十三年(一五三四)に長洲(江蘇州蘇州市)の黃省曾が刊刻
した北魏の酈道元『水經注』四十卷。黃省曾刻本『水經注』の書影は『明
代版刻圖釋』(學苑出版社、一九九八年二月)第一冊頁二四四に見え、
本文首行の書名を「水經」と題する。倉田淳之助・近藤光男編『君山先生
藏書目錄』(京都大學人文科學研究所、昭和二十八年三月)頁二九上段に「水
經四十卷 後魏酈道元注 嘉靖十三年吳郡黃省曾刊本 一一(冊)」と著
録される。一本が董康のこの贈呈本と思われる。倉田氏の跋文によれば、こ
の目錄の著録本は該目錄出版の前年の秋に京都大學文學部に寄託されたとい
う(ただし本版に捺された京都大學の受け入れ印には「昭和28.3.21」
とある)。その後『京都大學文學部漢籍分類目錄 第一』(京都大學文學部、
昭和三十四年三月)は、「明吳瑄校」と校者名を補い、冊数を「四一」に
訂正している。現所藏機關の京都大學文學部研究科圖書館の御許可を得て實

- 査してみたところ、卷一・二の各首葉第四行に「明 吳 瑄校」、卷三以下
は「明 吳中珩校」とあった。また「嘉靖甲午(十三年)三月吳郡黃省曾撰
の「刻水經序」の前に「萬曆乙酉(十三年、一五八五)端陽月琅琊王世懋撰
の「重刻水經序」を附し、黃本が「校讎不精」であったので、この書を「絶
愛」した吳瑄が重刻を志した旨が記されている。したがって本版は「吳瑄・
吳中珩校」、「萬曆十三年序刊」とすべきである。本版は和紙の襖紙や護葉
を加えて補修し、毎卷一冊に裝訂され、每冊首葉に朱文雙邊「堀氏/文庫」
の舊藏印を見る。これは幕末、信濃須坂藩主の堀直格の藏書印である。和
紙を用いて補修されていることと相俟つて、この本が唐館で將來されてき
たことを物語る。それゆえ董康が日本で本版を入手したと見なしてよかろ
う。ただし本版には董康の舊藏や贈呈を示す徵證を見ない。
- (4) 『東京夢華錄』は、南宋の孟元老が著した北宋の都の汴京(河南省開封市)
に關する記録。皇城の様子や都會の風俗、年中行事などが活寫されている。
入矢義高・梅原郁兩氏の譯注が「東洋文庫」五九八(平凡社、一九九六年
三月)にある。
- (5) 「鳳凰臺上憶吹簫」は詞牌名。本作は前後二段、すべて九十一字からなる。
ところが「鳳凰臺上憶吹簫」の詞調に九十一字體はなく、後段「堪憐」の
下に四字あれば九十五字體の「鳳凰臺上憶吹簫」として整う。
- (6) 「羅敷」は、後漢の民歌「陌上桑」(『樂府詩集』卷二八)に歌われた秦
氏の美女。ここでは紫式部の美しい容貌をいう。
- (7) 「青女」は、霜雪を司る女性神。『淮南子』天文訓に「青女乃出で、以
て霜雪を降らす」とあり、後漢の高誘の注に「青女は、天神、青霄玉女に
して、霜雪を主る」とある。紫式部の節操が清く堅いことを喩える。
- (8) 「鬘天」は、佛教に説く神、三十三天の一つで欲界十天のひとつの持華
鬘天(持鬘天)をいう(『法苑珠林』卷五「三界篇」諸天部辨位)。
- (9) 唐の孟郊(列女操「明の高棟」唐詩品彙」卷二〇)、清の孫洙『唐詩
三百首』卷一)に「波瀾誓不起、妾心古井水(波瀾誓ひて清こさず、妾が
心は古井の水)とあり、貞節の堅さをいう(なお宋版『孟東野詩集』卷
一の下句は「妾心井中水」に作る)。ここでは紫式部が藤原道長の戀慕を
拒んだこと(下文引用の『大日本史』の「紫式部傳」に見える)を意味する。
- (10) 「絳芸選夢」は、清の小説『紅樓夢』第三十六回(回目「繡鴛鴦夢兆
絳芸」とある)に、主人公の賈寶玉が絳芸軒で見た夢の中で、「金玉姻縁(薛
寶釵との結びつき)よりも何と言っても「木石姻縁(林黛玉との結びつき)」
がよいと叫ぶくだりがあるのに基づいた句。賈寶玉と薛寶釵・林黛玉ふた
りの女性をめぐる繰りひろげられた情節が『紅樓夢』の主要な内容となっ
ている。

(11) 二者の優劣をつけることをいう。「春秋左氏傳」隱公十一年の「滕侯・薛侯來朝し（魯の隱公にお目通りする）、長を争ふ（禮を行う先後を争う）」に基づく。

(12) 下文に引く『大日本史』紫式部傳に「源氏物語」五十四帖を著す。醍醐・朱雀・村上三朝の實錄に假托し、空に架し虚に憑り、結構は精妙にして、古今に度越す」とあるのによる。

(13) 「雞林」は新羅。唐の元稹「白氏長慶集序」（『元氏長慶集』卷五）が「雞林の賈人（商人）市はんことを求むること頗る切なり。自ら云ふ本國の宰相、毎に百金を以て一篇に換ふ」と述べ、白居易の作品が他國にまで熱く愛好されている逸話を記すのに基づく。「源氏物語」が人氣を博して争うように買われ求められていることをいう。

(14) ヨーロッパにおける『源氏物語』の譯本は、末松謙澄による一八八二年の英譯版が最初とされるが、一九二五年から二八年にかけて出版された英國のアーサー・ウェイリーの翻譯がよく知られる。

(15) 「某女士」は與謝野晶子を指す。與謝野晶子による現代語譯は、『新譯源氏物語』として明治四十五年（一九一三）から大正二年（一九一三）に金尾文淵堂より出版されたのを最初とする。

(16) 「三卷」、「大日本史」は「二卷」とする。「樂府」は、『白氏文集』卷三と卷四の「新樂府」を指すので、『大日本史』が「二卷」に作るのが正しい。

十六日

夜明けとともに起床。雪が降りしきる。荷物を點檢。七時、「劉」錫堂に小林の次男と神戸港の上海丸まで見送らせる。東京で村上〔貞吉〕と約束し、いっしょの船で上海に行くことにしたからである。八時、小林が来て長男および「楊」鼎甫と私が船に乗るのを見送られる。鼎甫は二日後の船を待つて、天津に直行するつもりである。錫堂はここに留まって製版にたずさわることにした。京都驛に着くと狩野〔直喜〕・倉石〔武四郎〕・吉川〔幸次郎〕が相次いで見送りに来る。握手して別れ乗車。一時開半で神戸に到着。乗船するところに村上君と相會する。十一時、出航。小林などの人達は、埠頭で雪降る中に立っ

てハンカチを振りお別れをしてくれる。私も遙かにこれに應え、思わず涙がはらはらとこぼれる。こうした思いは、當地において味わうのがこれまでで最も胸にしみる。人の姿が見えなくなるのを見届け、ようやく船室に入った。私の部屋は一一三號室で、村上君は一一五號の隣り合わせであった。楊「无恙」と孫「逸齋」は一二二號。夜の十二時に門司を過ぎ、栗島に出てから風波が荒くなる。室内のチーム暖房が効き過ぎて寝付かれない。七言律詩を一首作り、小林に送る。

小林忠治送余登舟別去入夜追憶舊游不能成寐擦燈吮墨作此寄之

追憶し、寐りを成す能はず、燈を擦り墨を吮め此を作りて之に寄す

雞林聲價舊傳揚 雞林の聲價舊と傳揚し

編紵論交軼范張 編紵交はりを論ずれば范張を軼ぐ

【丙寅避囂東航、易名沈玉聲（丙寅、囂を避け東航するに、名を沈玉聲と易ふ）。】

忝拜母堂承慰問 忝くも母堂に拜して慰問を承け

【太孺八旬管六尙康健（太孺八旬管六なるも尙ほ康健なり）。】

能於藝術見文章 能く藝術に於いて文章を見す

【君製版爲東西二京之冠。今流傳尙書・禮記・春秋正義、其他宋槧、皆所攝印也（君の製版は東西二京の冠爲り。今流傳する尙書・禮記・春秋の正義、其の他の宋槧は、皆攝印する所なり）。】

東坡買宅誠虛幻 東坡宅を買ふは誠に虚幻

【余昔年結廬東山、歸航棄去（余昔年、廬を東山に結ぶも、歸航

【に棄て去る。】

徐福求仙太渺茫⁽⁵⁾ 徐福仙を求むること太だ渺茫たり

風雪津亭勞遠送 風雪津亭 遠送を勞し

那堪身世屢滄桑⁽⁶⁾ 那ぞ堪へん身世屢しば滄桑たるに

【十年中、在此處握別、已三度矣（十年中、此の處に在りて握別すること、已に三度なり）。】

小林忠治「郎」が、私が乗船して別れ行くのを見送ってくれた。夜になって過ぎ去った交遊を思い出して寝られず、燈りをともして毛筆をなめてこの詩を作り、彼に郵送する。

むかし新羅で評判が高かった白居易の作品と同様にあなたの寫眞製版の優秀さは傳え廣まっており、あなたと私との友情は范式と張劭を越えるほど厚い【丙寅の年（一九二六年）、騒ぎを避けて日本に渡航したとき、沈玉聲という名前に變えた】。忝なくも御母堂に挨拶して勞りの御言葉をもらい【御母堂は八十六歳でなおも健康である】、あなたは技術の方面で才知を表している【あなたの寫眞製版は東西兩京で一番である。現在流傳する『尚書』『禮記』『春秋』の各『正義』およびその他の宋版は、すべてあなたが寫眞印刷したものである】。蘇東坡が莊宅を買ったものの生前に住めず、まさに空しい幻となったごとく、私の東山の寓居もすでに過去のものとなり【私は昔、東山に居宅を構えたが、歸國の途に就くときに手放した】、徐福が仙薬を求めて日本に渡來しても廣々としてあてどもなかったように、かつての跡を探すことはできなかつた。雪が舞う中、港にまで遠く見送りに來て下さったのは、激しい世相の移り變わりに幾たびも苦しめられる我が

身にとり、堪えられないほどうれいことであつた【この十年のうち、ここで握手してお別れするのがすでに三度になつた】。

(1) 「縞紵」は厚い友情。春秋時代、呉王の季札が鄭の大臣の子産と會つたときに昔なじみのように思われ、縞帶（白色の生絹の帶）を贈ると、子産は紵衣（麻の衣）を献上したという故事『春秋左氏傳』襄公二十九年に因む。

(2) 「范張」は堅い友情で結ばれた後漢の范式（字巨卿）と張劭（字元伯）。約束した再會の日に范式が鶏をつぶし黍を炊いて待っていると、張劭は期日を違えず訪れた『文選』卷二六「贈張徐州護」詩の李善注に引く謝承『後漢書』。また後に張劭が自らの計報を夢見て知らせたのを受け、范式は葬送に駆け付けることができた『後漢書』范式傳。『蒙求』に「范張鷄黍」の標題がある。

(3) 小林忠治郎がコロタイプ影印を請け負つた『尚書正義』二十卷は昭和三四年（一九二八・九）に大阪毎日新聞社から刊行された。また『禮記正義』と『春秋正義』は前日の注（2）参照。

(4) 北宋の蘇軾（號東坡）は、老後の生活の場とすべく常州（江蘇省）に居宅と莊園を購入したが、海南島にまで左遷され、歸還途中に死去し、この莊宅に住むことなく終つた。

(5) 「徐福（徐市）」は秦代の方士。秦の始皇帝は彼を遣わし海中の三神山に仙人や不老不死の神薬を求めさせたが、莫大な費用を無駄にするだけであつた（『史記』秦始皇本紀）。三神山のうちの瀛州が日本とされる。

(6) 「滄桑」は世事の激變をいう。「滄海桑田」の故事に基づく。本書卷四、四月三十日の注参照。

十七日

晴れ。朝食後、小林に手紙を書く。九時、長崎に到着。村上君が上陸して散歩しようと誘う。私もついでに京都に手紙を出し、また上海に迎える電報を打つことにする。楊・孫二君も同行し、市内に行く。村上の誘いで、控訴院に行き彼の友人を訪ねる。續いて諏訪山に登る。上には神社があり、百七十餘段の石段を上がる。楊无恙は脚力が弱い

ので、山腹の二銅柱（青銅の大鳥居）で待つ。午砲をふと耳にしたので、船に戻ろうと村上に促した。彼は「五時の出航だから、心ゆくまで見物しても構わない」という。確か彼は上海から渡航したので、出航は午後五時であった。しかし歸りの航路では一時になっており、往復で時間が異なることを彼は全く知らなかった。午後一時四十分には埠頭に着くと船は出てしまっており、一同驚く。當社の係員がやって来て、「船長は一時半まで待っていました、すでに定刻を過ぎて、皆さんの歸ってくる気配がなく、電話で訊ねることもできず、船客からは出港を迫られました。やむを得ず各室の荷物をこちらに置き、上海行き乗船券を變更しました。少し落ち着いて下さい、焦ることはございませぬ。」という。荷物を点検すると間違いはなかったが、船倉内に預けた書籍の柳行李十函だけがこちらになかった。係員に付き従

い「日本」郵船會社の事務所に行き、上海丸に無線を打ち、船が上海に到着したときには、責任をもって荷物の箱を保管してもらおうと頼んだ。それから直ぐに海岸の小高い山の上にある平野屋に宿をとった。この旅館は海を前にして山に面し、閑静な立地で、客室の設備が行き届いていた。三人か五人ほどいる女中は、器量よしで人当たりがよい。これまで旅行した中で第一番に気に入った旅館である。无恙は大いに喜び、短い詩を作って本日のことを書き記し、私もこれに續く詩を作った。長崎は日本旅行において一番目の旅先に當たる。風景は美しく、秦代の人が「海上の仙山」と言ったのはここである。私は渡航することと二十數回になるが、この港だけは遊覽したことがなかった。思いも寄らない間違いをしでかし、山の神靈が山遊びの縁を果たすように命

じられたのであろう。當地の領事の張羽生とは東京において一面識がある。彼に電話を掛けたところ、張君が日本人の書記官の井手とともにやって来た。乗船し損なつた顛末を話し、上海の自宅に電報を打って、しばらく歸國が延びることを知らせてもらおうと頼んだ。六時ごろ張羽生がカールの皆花園での宴會に招いてくれた。園には某大物がいる。敷地がすべて花で覆われており、扁額はこれに因んで名前がつけられた。このことは往時、北京の陸文貞公が江蘇會館の扁額の名を書くのに、庾蘭成（庾信）の「江南春賦」の末句「無江南兮江北（江南江北無し）」に據つて「崑春堂」とした故事を受け繼いでいる。旅館に歸るとすでに十時であった。

因登諏訪山誤舟投宿平野屋

諏訪山に登るに因りて舟を誤まり平野屋に投宿す

〔其の一〕

〔其の一〕

不隔神州路幾千

神州 路幾千を隔たらず

採風問俗且留連

風を採り俗を問ふて且く留連す

無端觸起迷津感

端無くも津に迷ふの感を觸れ起こすは

爲缺名山笠屐緣

名山笠屐の縁を缺くるが爲なり

諏訪山に登つたがために乗船し損なつて平野屋に宿泊する

〔其の一〕

中國からの道のりは幾千里もない。この長崎の風俗を尋ねるべく少しのあいだ居續ける。思いがけず渡し場が分からなくなった氣がして乗船し損なつた。名山に遊ぶ縁が結ばれていても行かずにいたので、

山の神がその罪を償わすために登山させたものと思われる。

〔其二〕

仙蹤探藥^⑤渺難尋 仙蹤藥を採ること渺^ぶとして尋ね難し

勝負楸枰^⑥閱昔今 楸負^{しうひ}の楸枰 昔今を閱す

擊楫中流誰健者 楫を中流に擊す誰か健なる者

頓教祖逃輟^⑧雄心 頓^{にはか}に祖逃^{そてき}をして雄心を輟^やめしむ

〔其の二〕

仙人の足跡をたどって神藥を採ろうにも當てどころは遙か探しがたく、碁盤の遊びに等しい勝負ごとが古今繰り返されたことをつくづく知った。長江を渡る半ばで船の楫を叩いて中原奪還を誓った祖逃に匹敵する強豪の士は誰か。しかし突如としてその者に祖逃のような雄々しい心を棄てさせた。

〔其三〕

新詞慣唱采春劉 新詞唱ひ慣る采春劉

幾度江干誤去舟 幾度の江干 去舟を誤る

昨夜燈檠空結蕊 昨夜 燈檠^{とうけい} 空しく蕊^{ずい}を結ぶ

又勞鏡聽祝刀頭 又鏡聽を勞して刀頭を祝る

〔其の三〕

劉采春は夫の歸りを望む新作の歌詞を馴れ歌うほど待ちわび、夫が乗っていない船を歸り船だと何度も波止場で見間違った。昨夜、燭臺の燈芯に丁字がのった吉兆はあだごとになり、またもわざわざ鏡を抱き門端で占いをして無事の歸還を祈る。

張羽生領事招飲皆花園即席賦此時羽生有内遷消息

張羽生領事、皆花園に招飲し、即席にて此を賦す。時に羽生

に内遷の消息有り

名園樽酒暢高情 名園の樽酒 高情を暢^のぶ

兩度相逢歲律更 兩度の相逢 歲律^{あまた}更まる

歸去神州程萬里 神州に歸り去る程萬里

輶車^⑬佇傍使星明 輶車^{えうしや}傍^{かたはら}に佇み使星明^{たす}かなり

張羽生領事が皆花園での宴會に招待してくれ、宴席にてこの詩を作った。折から羽生には國內轉勤の知らせがあった

名庭園における酒席でお心盡くしの接待を受けた。あなたとは歳を改めて二度目の出會いとなった。中國に歸還するには萬里の行程があるが、使者であったあなたが乗る車は傍らに控えて使星が輝いている。

誤舟長崎留宿平野屋作 无恙

舟を長崎に誤り、平野屋に留宿するの作

千里毫釐問渡難 千里毫釐^{がうり} 渡を問ふこと難し

何須興歎枉闌珊 何ぞ須^{もち}ひん興歎して枉^{また}りに闌珊^{らんせん}たるを

海航頗解行人意 海航頗る行人の意を解く

留滯高樓飽看山 高樓に留滯し飽くまで山を見る

長崎で船に乗り損ない平野屋に宿つての作

大きな間違いが初めの僅かな間違いから起こって渡し場を探し問うこと（渡航）が困難になった。しかし悲歎して無闇に意氣消沈することはない。海の旅は旅人の氣持ちをととも癒してくれるから、この旅館の高樓に滞在し存分に山を見て楽しもう。

授老示詩予亦同夢襲其意成廿八字¹⁷

授老、詩を示さる。予も亦同夢、其の意を襲ひ廿八字を成す

長崎日月同中夏 長崎の日月は中夏に同じ

西少東多暫爾違 西少東多 暫爾違ふ

勸往蕁碁山外曲¹⁸ 蕁碁山外の曲を往めんことを勸む

年頭歳尾阮郎歸 年頭歳尾 阮郎歸る

授金(董康)さんが詩を示された。私も彼の親密な友人であり、

その詩意を受けて二十八字詩(七言絶句)を作り上げた

長崎に出る太陽と月は中國と同じである。輝く時間は西の中國に少

なく東の日本に多いが、それとて暫くの違いである。夫の歸還を願う

「蕁碁山外の曲」を歌うのは止めるがよい。阮肇¹⁹というべき愛しい夫

は新曆の年頭、舊曆の歳末には歸ってくるから。

(1) 「江蘇會館」は北京での科學を受験する江蘇の者が滞在した施設。『北京會館資料集成』(學苑出版社、二〇〇七年四月、頁七二二)によると、創建は清代で、宣武區牛街街道北半截胡同二三號にあったが、二〇〇〇年に取り壊された。これとは別に、同書「學術專著」(頁七六四)に見えるところでは、宣武區粉房琉璃街にも江蘇會館があったという。なお「陸文貞公」は未詳。

(2) 「江南春賦」は唐の王傑²⁰の作で、その作品集「麟角集」や「唐文粹」巻九八に収録されている。董康が「庚蘭成」(蘭成は北周の庚信の幼少時の字)とするのは誤り。なお末句「無江南兮江北」の上の句には「今日併爲天下春(今日併はせて天下の春と爲り)」とあり、二句は、南北朝の分裂が終わって天下が統一され、江南と江北の區別なく天下等しく春「苴春」となったことをいう。

(3) 「採風問俗」は、中國古代に風俗を通して政治の得失を知るため、各地を巡って民歌を採集する「採(采)詩官」がいたとされること(『漢書』藝文志など)に基づき、董康が長崎を見てまわることをいう。

(4) 「名山笠屐緣」は、思いがけない間違ひから長崎に逗留、觀光することになったことについて、本日の記事に「殆出此意外之錯誤、山靈責令笠屐緣也(思いも寄らない間違ひをしてかき、山の神靈が山遊びの縁を果たすように命じられたのであろう)」と述べることを受けた措辭である。

(5) 「仙蹤採藥」は、秦の徐福が東海の神山に仙人、仙藥を探し求めた故事を用い、董康の日本訪問をいう。前日の注(5)参照。

(6) 「楸枰」の「楸」は落葉高木のヒサギ、木質が緻密で堅く碁盤に適する。「枰」は碁盤。

(7) 「擊楫中流」は、東晉の祖逖が北征する際、長江を渡る半ばで楫をたたいて中原回復を神に誓った故事。本書巻二・二月四日の「讀史有感」其一に「伊誰擊楫誓中流(伊れ誰か楫を撃ち中流に誓ふ)」とあり、その注参照。

(8) 「祖逖」は前注参照。この句は國民黨の第二次北伐が軍閥勢力を完全に消滅させることなく、一九二八年十二月に終わったことを暗にいうのであろう。

(9) 「采春劉」は唐の歌妓の劉采春。彼女は羅(囉)嘯曲の「望夫(夫の歸りを待ち望む)歌」が得意で、「囉嘯曲」其三の後半に「朝朝江口望 錯認幾人船(朝朝江口に望み、錯り認む幾人の船)」とある(『雲溪友議』巻下)。ここでは董康の歸航を待つ妻を指す。

(10) 「蕊」は燈芯の燃え残りが花蕊のように固まること。吉兆と見なされた。日本でも「丁字が立つ」として縁起を擔いだ。

(11) 「鏡聽」は鏡を抱いて門端で行う辻占の一種、「卜鏡」ともいう。本書巻一下・一月二十二日の「玉嬈來函……」詩其三に「人鏡卜祝刀鑲(人の鏡もて卜ひて刀鑲を祝る有り)」とあり、その注を参照。

(12) 「刀頭」は刀の柄頭。「刀鑲」に同じ。環状であることから、「歸還」の「還」に通じる。前注参照。

(13) 「輶車」は使者の乗る車。ここでは領事の張羽生が歸還して乗る車をいう。

(14) 「使星」は使者。「使臣星」「星使」ともいう。後漢の和帝の時、李郃がオ忍びの二人の使者の訪れを天文の二使星から察知した故事に因む(『後漢書』李郃傳)。

(15) 『无恙後集』續稿(錢仲聯・祁薇合編、一九六〇年序刊)には「長崎誤舟留宿平野屋」と題し、「且住看山未必非、望洋空歎誤毫釐、健鵬怒翼須停翅、目斷南冥不得歸(且く住まり山を見るは未だ必ずしも非ならず。望洋として空しく毫釐を誤るを歎ず。健鵬の怒翼も須く翅を停むべし。南冥(南のはての海)を目斷して(目のとどく限り望み)歸るを得ず)」という別の七言絶句一首を載せる。

(16) 「千里毫釐」は、『史記』太史公自序に「毫釐之失、差以千里(毫釐の失、

差さふに千里を以てす」とあるのに基づき、大きな過失（ここでは董康一行が乗船し損なつたこと）は初めの小さな過失（長崎市内に出て諏訪山を見物したこと）が招くことをいう

(17) 『无恙後集』續稿では題を「誤舟長崎授老有憶内之作戲和廿八字（舟を長崎に誤り、授老、内（妻）を憶ふ作有り、戯れに和す廿八字）」、本文を「崎陽日月同中夏、弱水三千暫爾違、莫唱蘂砧山上曲、年頭歲尾阮郎歸（崎陽（長崎）の日月は中夏に同じ。弱水（神話中の渡り難い海）三千暫爾に違ふ。唱ふ莫かれ蘂砧山上の曲、年頭歲尾阮郎歸）」と改めている。

(18) 「蘂砧山有外曲」は、「蘂砧今何在、山上復有山（蘂砧今何くにか在る。山上復た山有り）」とある「古絶句」其一（『玉臺新詠』巻一〇）を指す。「蘂砧」の二句は旅に出ている夫の歸還を待つことをいう。本書巻一下・一月二十二日の「玉嬾來函……」詩其三に「樂府類歌山上山（樂府は類に歌ふ山上の山）」とあり、その注參照。

(19) 「年頭歲尾」について、『无恙後集』續稿には「西曆新年當夏曆歲尾（西曆の新年は夏曆の歲尾に當たる）」という自注を附す。

(20) 「阮郎」は劉眞と天台山中の仙界に入り女仙と遊んだ後漢の阮肇。愛する男の意味に用いることがある。ここでは妻から見た董康を指す。

十八日

晴れ。午前十一時、同行者と共に張羽生領事に會つて答禮。この廳

舎は光緒元年（一八七五、明治八年）に建てられ、五十餘年も経つており、古くなって建て替への必要がある。しかし各國の大使館・領事館はアメリカと日本を除いては、みな建物を借りている。いわゆる「心を慰められるのなら無いよりはまし」である。長崎は古くより九州に屬しており、地區内では雲仙岳が景勝地である。近々、政府によって開發され（國立）公園となる⁽²⁾。羽生と一緒に遊覽しようとして誘つてくれたが、往復二泊もかかり、旅程が滞ることが懸念された。そこで羽生の案内で左寄り（長崎灣東）の三唐寺を見物することにした。いずれも明代に中國の商人が浙江や福建の名僧を招き、在住開基された

もので、堂宇はすべて天竺(3)様式に倣っている。歴代の住持はみな唐僧であつたが、現在では日本人に變つた。寺は國寶に列せられている。寺はすべて三ヶ寺。

一、福濟寺 寛永二年（一六二五、明の天啓五年）【碑には「五年」とある】に建てられた。最初、泉州の僧、覺海が日本に渡來した時に岩原郷の良い場所【すなわち現在地（現筑後町）】を選んで庵を結び、天后聖母（媽祖）を奉安して、漳州（福建省漳州市）・泉州（福建省泉州市）・永州（湖南省永州市）⁽⁴⁾三地方の船舶の航海の無事を祈つた。慶安二年（一六四九、清の順治六年）、檀越筆頭の額川藤左衛門の要請に應じ、溫陵（泉州の別名）紫雲山開元寺の僧、蘊謙戒琬禪師【第一代】が招かれ、日本に渡來してこの寺に入った。山號は「分紫山」⁽⁵⁾。翌三年、左右の土地を開いて圓通殿が建てられ、衆寮（衆僧の宿舍）や齋堂（禪僧の食堂）も建造され、面目が一新し、參拜者が絶えなかつた。承應三年（一六五四、順治十一年）、教化のために東來した興福寺の隱元禪師に參觀を要請した。また明曆元年（一六五五、順治十二年）秋、木庵禪師、その侍僧の雪機・喝禪・慈岳【第二代】などに日本渡來を要請し、蘊謙は住持の席を譲つて、堂宇を開いて説法させた。これ以來、紫山派の宗風が遠近に廣まった。明曆三年、能書家の悅山が渡來する。萬治元年（一六五八、順治十五年）、穎川氏が山門を建立。延寶元年（一六七三、康熙十二年）六月、蘊謙が圓寂する。この後、東瀾【第三代】、獨文【第四代】、喝浪【第五代】が跡を繼いだ。延寶・天和年間（一六八一、康熙二十年）の米不足には、慈岳が立ち上がり、東瀾などと相謀つて窮民救濟を行い、長崎の民衆は「救世の居士」と

して尊敬し、今に至るまでその遺徳を讃えている。また寶永七年（一七一〇、康熙四十三年）に全巖【第六代】、享保七年（一七二二、康熙六十一年）に墨竹畫に秀でた大鵬【第七代】が相繼いで渡來する。第七代の主席は本寺から出た。黄檗山で出世した木庵・悅山・獨文・大鵬は紫衣を賜った。隱元の恩寵待遇がとりわけ厚く、後水尾および歴代の天皇の尊崇を受け國師となった。大正天皇からは眞空大師の諡號を戴いた。まことに格別の光榮である。大雄宝殿（本堂）の本尊である三尊像は普陀山（浙江省舟山市）から傳來したもので、唐の楊貴妃の持佛と傳えられている。【以上、「大修理趣意書」を抄譯】

二、興福寺 本寺の開基の眞圓は江西浮梁縣（江西省景德鎮市浮梁縣）の人。元和六年（一六二〇、明の泰昌元年）、長崎に渡來し、本寺の現在地に草庵を結び隱棲。當時、常に明人の中にキリシタン教徒がおり、長崎奉行が幕府の命令を奉じ、嚴重に居留民を取り締まった。南京地方の船主が寄附して一寺を建立することを願ひ出、本寺の現在地に佛殿が建設されて、眞圓を開基とした。唐僧の黙子如定が寛永九年（一六三二、明の崇禎五年）に渡來し、十一年になって、酒屋町と古川町との間に長さ十二間半、幅二間六合の眼鏡橋を造った。日本における明朝式の石造橋はこれから始まった。黄檗宗開祖の隱元禪師は、承應三年（一六五四、順治十一年）七月五日の夜に長崎に入り、翌日に上陸した。本寺の第三代住職の逸然が檀信徒および弟子達を引き連れて出迎え寺に入れた。ゆえに本寺が、隱元が最初に足を踏み入れた寺院となる。初代から第九代までは唐僧で、第十代以下は和僧。現在の松尾旭峰は第三十一代である。【本寺の印刷物を抄譯】

三、崇福寺。寛永六年（一六二九、崇禎二年）に創建。延寶・天和年間の飢饉には、第二代の千杲が書籍や墨蹟を賣り、大きな釜をこしらえて粥を炊き、貧民に施行した。その釜が寺に今ものこっているの
で、またの名を大釜寺という。山門は龍宮門といい、嘉永二年（一八四九、道光二十九年）の重建。「聖壽山」の扁額があり、隱元大師の筆になる。兩側にくぐり門があり、右は「如意」、左は「吉祥」という。大雄寶殿は正保三年（一六四六、順治三年）の建立。中央に釋迦を奉安し、脇侍に迦葉波・阿難陀の二尊者、左右に十八大阿羅漢、みな明の佛師の印官范道生の作である。護法堂は關帝堂ともいい、享保十六年（一七三一、雍正九年）建立。中央は觀音大士、脇侍は善財と龍女、右壇には關帝（關羽）、脇侍は關平と周倉、左壇には韋馱天と彌勒（布袋）・五方五帝。本寺の開山は超然外長老、重興は道者超元、開法は即非如一である。いずれの禪師も福州から渡來した高僧であるので、また福州寺とも呼ぶ。最初は媽祖を祀って航海の無事を祈願した。前後足を留めた唐僧は三十餘人に及ぶ。その中で黄檗宗は千杲・靈源・伯珣・大成の四人である。超然の渡來は慶安三年（一六五〇、順治七年）で、隱元に先んずること四年であり、黄檗禪を傳えた最初の人である。

午後三時、羽生が一同の旅館に戻るのを送り、別れ去る。この旅館の主人は平野信子といい、守貞のむすめである。年齢五十餘で料理が上手。今夜は特別の料理を出す。大きな頭の魚を煮た一品は脂がのって美味しく、これまで口にしたことがない味わいであった。无恙はその場で詩を作ったが、それに「絶似西湖宋五嫂、紅爐親手煮魚羹

（絶^{はなは}だ西湖の宋五嫂に似て、紅爐に親ら手づから魚羹を煮る）という句があつた。また東坡肉^{トシゴロクニ}は江蘇の風味にとても似ていた。日本に旅行してから公私の宴會で出た料理の中で今日のが第一番として推奨できる。

福濟寺本尊三像由普陀傳來相傳爲楊貴妃所供奉

福濟寺の本尊の三像は普陀より傳來し、相傳へて楊貴妃の供奉する所と爲す

〔其の一〕

杯渡¹²於今罔計年 杯渡今に於て年を計ふる罔し

雪衣也沐蛻塵¹³縁 雪衣も也蛻塵の縁に沐す

如何一滴楊枝露¹⁵ 如何ぞ一滴の楊枝の露

不酒驪山馬足前¹⁶ 驪山馬足の前に酒がざる

福濟寺の本尊の三像は普陀山から傳來したもので、楊貴妃の持佛と傳えられる

〔其の一〕

木の杯に乗って渡來した楊貴妃の持佛は今に至るまで何年おられるのか數えられない。白鸚鵡の雪衣女も汚れを脱する佛縁を受けた。それなのにどうしてこの佛は、一滴の楊枝の露でさえ、驪山の軍馬の前で亡くなった者に振りかけず、蘇生させなかつたのであろう。

〔其二〕

華冠¹⁷世外足風流¹⁸ 華冠 世外 風流足る

睽隔¹⁹華清春復秋 華清に睽隔し春復秋

枉使鴻都窮上下²⁰ 枉に鴻都をして上下を窮めしむ

〔其の二〕

香魂先已渡瀛洲²¹ 香魂先に已に瀛洲に渡る

【借用香山長恨歌意（香山の長恨歌の意を借用す）】

〔其の一〕

花冠をかぶつた楊貴妃は人間界を去つて女仙となつても艶治な雰圍氣をたっぷり備え、華清宮を離れて幾年も過ごしていた。玄宗が長安に來た道士に天上と地下にまで貴妃を探させたが全くむだで、彼女の魂はとつくに瀛州の仙山に渡っていたのであつた【白居易の「長恨歌」の詩意を借用した】。

拊无恙作 无恙の作を拊す

〔其二〕

一別金身恨已長 一たび金身に別れて恨み已だ長し

塵縁還借海南香²⁴ 塵縁還て海南香を借る

【太真一度爲女道（太真は一度、女道士と爲る）】

珠鈿未醒梨花夢²⁶ 珠鈿未だ醒めず 梨花の夢

唐土如來久姓楊 唐土の如來は久しく姓は楊

无恙の詩を附録する

〔其の一〕

ひとたび金身の御佛と思う玄宗と別れて離別の恨みを抱くこと甚だ長く、かつて人間界で女道士であつた縁から女仙となり海南の香に包まれた【太真はかつて一度、女道士となつた】。眞珠や螺鈿の飾り物を身につけてまだ眠りから覺めやらずに立ち現れた太真は、梨の花のように美しい夢見ごこちの風情であつた。このような楊貴妃を寫し

取った佛像が古く唐土からこの寺に傳えられた。

〔其二〕

〔其の二〕

縹渺仙山此一隅²⁷ 縹渺たる仙山は此の一隅

精靈道士說鴻都²⁸ 精靈の道士は鴻都と説く

今看金粟旃檀影²⁹ 今看る金粟旃檀の影

得似沈香亭子無³⁰ 沈香の亭子に似たるを得るや無や

〔其の二〕

遠くぼんやりと見える仙山は東海上のこの一隅にある。魂を招き寄せる靈力を持ち、長安の都を訪れた旅人であると稱する道士がここを尋ねあてた。東海の神山で仙女になった楊貴妃の持佛と傳えられる梅檀作りの佛像を今見たが、沈香亭で牡丹と美しさを誇った楊貴妃に似ているであらうか。

贈居停主人平野信子

〔董康〕

居停の主人の平野信子に贈る

岐路感蹉跎³¹ 岐路に蹉跎たるを感ずるも

相逢雅誼多 相逢ひて雅誼多し

清樽開北海³² 清樽 北海に開き

佳饌出東坡 佳饌 東坡を出だす

估舶門前繫 估舶は門前に繫がれ

山雲檻外過 山雲は檻外に過ぐ

聊將今夕意 聊か今夕の意を將て

書此鎮巖阿 此を書して巖阿に鎮す

旅館の主人の平野信子に贈る

分かれ道に立って失意を感じたが、人との出会いにおいて厚い情誼に多く接した。「この旅館の女將も情が厚く、」よい酒樽の蓋を孔北海のように酒の解る我々のために開け、美味な料理には蘇東坡が考案したという東坡肉を出してくれた。門前に停泊している商船が望まれ、山肌を流れ行く雲が手すり越しに見える。今夜の感興を詩にし、これを書きしたため山腹のこの旅館に留め置く。

(1) 東晉の陶淵明「和劉柴桑」詩『靖節先生集』卷二の「慰情良勝無(情を慰むるに良に無きに勝る)」に基づく。

(2) 雲仙が國立公園として正式に指定されるのは、この記事よりほぼ二箇月後の昭和九年三月十六日である。董康の記述は、前年の十二月に國立公園委員會總會で指定の承認が得られていたことによるものである。

(3) 「天竺」は、原文「天台」に誤るのを訂正した。字形が近いための誤り。長崎の三唐寺は天竺様すなわち中國近世以後の寺院建築の様式である。「天台」では意味が甚だ異なる。

(4) 「永州」は沿海地ではないので、地名に誤りがある。「福州」と訂正すべきであらう。

(5) 原文「分號紫山」とある誤りを「號分紫山」に訂正して譯した。

(6) 原文「後永尾」とある誤りを訂正した。

(7) 「六合」は未詳。

(8) 『聖壽山崇福寺案内』(崇福寺、一九六六年五月。説明文筆者は宮田安氏)は、この記述と異なり、「開基の僧超然は、寛永六年、六十三才で長崎に渡來した福州人であり、……嗣法の僧ではなかったものと思われ、禪の系統がはっきりしない」という。

(9) 「宋五嫂」は、もと汴京(北宋の都、河南省開封市)の居酒屋の妻で、南宋になって臨安(南宋の都、浙江省杭州市)の西湖近くに移り住み、「魚羹」作りがうまく、太上皇になった高宗にこれを進上したので、よく賣れて金持ちになった(明の田汝成『西湖遊覽志餘』卷三)。

(10) 『无恙後集』續稿には「平野屋主人信子精烹庖負病入厨酬以絶句(平野屋主人信子は烹庖に精しく、病を負ひ厨に入る。酬ゆるに絶句を以てす)」

と題し、「海山不枉滯行程、瓊浦芳鮮力疾烹。絕似西湖宋五嫂、紅爐煨袖煮魚羹(海山枉りに行程を滯らさず。瓊浦(長崎)の芳鮮力疾し(病を押し)て烹る。絶だ西湖の宋五嫂に似て、紅爐(爐)に袖を煨り魚羹を煮る)」とある。

(11)「東坡」は北宋の蘇軾の號。俗に彼が豚肉の角煮を考案したので、これを「東坡肉」と稱するようになったという。

(12)「杯渡」は六朝宋代の僧の名。常に木製の杯に乗って川を渡ったので、かく呼ばれた(梁の慧皎『高僧傳』卷一〇)。後に僧侶の出遊をいう。ここでは福濟寺の本尊が中國の普陀山から日本に將來されたことを指す。

(13)「雪衣」は、唐の天寶中、嶺南から獻上された宮中に飼育され、玄宗や楊貴妃たちが「雪衣女(娘)」と呼んだ白鸚鵡。雪衣女が猛禽に殺されそうになる夢を貴妃が見たので、玄宗は貴妃に命じ、『般若心經』を雪衣女(娘)に授けさせたところ、雪衣女はよく覚えて日夜唱え、禍を恐れてお祓いをしていくかのようにであった(『太平廣記』卷四六〇所引『譚賓錄』、『太平御覽』卷九二四所引『明皇雜錄』。後者は開元中のこととする)。

(14)「蛻塵」は蟬の幼蟲が蛻皮するかの様に世俗の汚れを脱すること。

(15)「楊枝露」は、佛教で萬物を蘇生させる靈力のある甘露。「楊枝水」。印度の渡來僧、仏圖澄は楊柳の枝につけた水を後趙の石勒の太子に灑ぎ、呪文を唱えて太子を蘇生させた(『晉書』卷九五・佛圖澄傳)。

(16)「驪山」は、長安の東郊(陝西省西安市臨潼區)にある山。詩意の流れからすると、「馬足前」は、軍馬の前に亡くなった人物、すなわち楊貴妃をいうと解すべきであるが、彼女は長安の西の馬嵬(陝西省興平市)で死を遂げたので、「驪山」では解しがたい。地名に誤りがあるか。

(17)「華冠」は「花冠」、美しい冠。唐の白居易の「長恨歌」(『白氏文集』卷一二)に、死後、仙界の人となった楊貴妃が玄宗の使者の道士に逢おうとする場面を描いて「花冠不整下堂來。花冠整へず堂を下り來る」とある。これに基づき「華冠」は楊貴妃をいう。

(18)「風流」は氣品。また男女間の艶情の意味も含む。

(19)「華清」は、唐の玄宗が驪山の麓に造營した離宮の華清宮。玄宗は楊貴妃と避寒のためこの離宮に滞在した。ここには温泉があり、その一湯を華清池という。

(20)「長恨歌」に玄宗が「臨邛の道士鴻都の客(長安の都に出てきていた四川臨邛の道士)」に死後の貴妃を尋ねさせ、道士は「上窮碧落下黃泉(上は碧落を窮め下は黃泉)」と、天上の蒼空の彼方と地下の黃泉の世界にまで探したが、「兩處茫茫皆不見(兩處茫茫として皆見えず)」と探し出されず無駄に終わったことが詠われている。

(21)「香魂先已渡瀛洲」は、「長恨歌」に臨邛の道士が楊貴妃を捜せなかったことに續き「忽聞海上有仙山(忽ち聞く海上に仙山有り)」とあり、海上の仙山で今は太眞と字する仙女になっていた楊貴妃と逢う場面が描かれることを受けた詩句である。「香魂」は美人の魂、すなわち楊貴妃の靈魂。

「瀛洲」は、東海にある三神山の一つ。ここでは日本を暗にいい、楊貴妃の持佛が日本の長崎、福濟寺に渡ったことをいう。

(22)「香山」は白居易をいう。彼は晩年、洛陽の南郊の香山寺への崇敬篤く香山居士と稱した(『白氏文集』卷七〇「香山寺新修經藏堂記」)。

(23)「金身」は金色に輝く佛像をいうのが常であるが、ここでは玄宗を指すと解しておく。

(24)「海南香」は、海南産の香料の意であろうが、楊貴妃あるいは「長恨歌」との關連は未詳。

(25)「太眞」は仙女となった楊貴妃の字。

(26)「未醒梨花夢」は、「長恨歌」に寢覺めたばかりの太眞(楊貴妃)が仙界に尋ね來た道士に會う姿を描く、「梨花一枝春帶雨(梨花一枝春雨を帶ぶ)」による。

(27)「縹渺仙山此一隅」の「縹渺仙山」は、「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虛縹渺間(忽ち聞く海上に仙山有り、山は虚無縹渺の間に在り)」とあるのに基づく。また「此一隅」は東海上の一隅、すなわち日本の長崎をいう。

(28)「精靈道士說鴻都」は、「長恨歌」の「臨邛道士鴻都客、能以精誠致魂魄(臨邛の道士鴻都の客、能く精誠を以て魂魄を致す)」の句を用いたもの。

(29)「金粟旃檀」は、香木の旃檀(栴檀、ビャクダン)で作った佛像。「金粟」は「金粟如來」、釋迦の弟子の結摩詰を指すが、ここでは福濟寺の本尊をいう。

(30)「沈香亭子」は玄宗が楊貴妃と遊んだ沈香で造られた亭(あずまの)。内の龍池の側にあった。李白が牡丹と楊貴妃の美しさを讃え、「名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看。解釋春風無限恨、沈香亭北倚闌干(名花傾國兩ながら相歡ぶ。長く得君王の笑ひを帯びて看るを得たり。春風無限の恨みを解釋し、沈香亭北闌干に倚る)」と詠った(『李太白文集』卷四「清平調」其三)。ここでは沈香亭において牡丹と並んで美しさを誇った楊貴妃の容姿をいう。「沈香」も香木であり、前句の「旃檀」と關連させた措辭。

(31)「蹉跎」はつまづく様子、また失意をいう。

(32)「北海」は後漢の孔融の別名。彼が北海國(山東省濰坊市昌樂縣西)の長官であったことに因む。孔融は魏の曹操が禁酒令を出した時、「天有酒旗之星、地列酒泉之郡、人有旨酒之德。故堯不飲千鍾、無以成其聖(天に

は酒旗の星有り、地には酒泉の郡を列し、人には酒を旨むの徳有り。故に堯は千鍾を飲まずんば、以て其の聖を成すこと無し。……」と書きしたためて嘲った(『三國志』卷二二裴松之注引く張璠『漢紀』)。

十九日

晴れ。寒さを恐れて門を出ない。孫逸齋に最近作った詩を書かせ、旅館の主人に記念として與え、壁に張った。无恙も三幅の繪を贈った。女中の悦子は美人で氣が利いたので貰えたが、朋輩には貰えず失望するものがいた。我々が船に乗り損なつたと小林が聞いて、電話で慰めてくれた。

二十日

早朝起床。風が強く雪が窓を拂い、さわさわと音がする。午後一時ごろ、海上に「ポーポー」という汽笛が響くのが聞こえた。遙かを見ると、上海丸がすでに入港し、岸壁に停泊していた。村上君を連れて乗船、荷物の保管状況を尋ね、雙方お詫びの言葉を交わす。村上君が戻ってから、領事館に出向き別れの挨拶をするつもりであったが、氣温が昨日に増して低いので致し方なく、日を改めることにした。村上君が「長崎附近に中國人の村落があつて、景色がいい。自動車で往復たった一時間です。觀光が不十分なら、なぜここに行かないのですか」という。私が「それはいい。もう四日逗留して、上海丸に乗って歸國したなら、前回の穴埋めになるだけでなく、楊君だってさらに詩が何首かできて歸りの荷物を満たせるし、私もよい職人に命じて續稿を出版できるでしょう」というと、一行の者が大笑いをした。旅館の

主人が料理をふるまう。どれも手を盡くして美味。肉炙骨(排骨へスペアリブ)を炙つたもの(の一品は骨を取り去って身をのこし、甘酸っぱく、故郷の味そっくりであった)。

二十一日

晴れ。早朝に起床し荷物を點檢。九時、長崎丸が山の下に停泊しているのが窓から見えた。旅館の主人と別れ、領事館に行き別れの挨拶をする。時に張羽生はまだ睡眠中。東濱町の二枝鱈甲店に行き、裝飾品を數點買つて乗船。南京總領事の須磨(彌吉郎)・靜嘉堂文庫職員の今關(壽麿、號天彭)と白堅甫(白堅)に遇う。今關は私に『四僧詩』一冊を贈る。堅甫は長春からの歸りであつたので、遼東の情勢を尋ねると、日本の新聞と違いがなかつた。午後一時、出航。張羽生が岸壁でお別れしてくれているのが遠くに見えた。彼が來たとき、私はちょうど客室でみんなと話しをしているところであつた。すぐに汽笛が鳴つて、あわてて陸に下りたようだ。四時ごろ、風波が急に起る。晚餐は僅か五、六人しかいない。小林に出す手紙を前もって書いておく。

邁まい陂塘ひたうと

【過二枝購玳瑁懷中鏡、因賦此闕、用代銘詞(二枝に過り玳瑁の懷中鏡を購ひ、因りて此の闕を賦し、用て銘詞に代ふ)】
解か鮫さま網あみ、細こ加か拂ふ拭ふ 鮫さま網あみを解かききて細こかかに拂ふ拭ふを加かふれば
一輪明月清朗 一輪の明月は清朗なり

西征前度留鴻雪⁽⁴⁾ 西征 前度に鴻雪を留め

佳製同裁心匠 佳製は同じく心匠に裁つ

【玳瑁製物品、長崎外以意大利爲最（玳瑁製の物品、長崎の外は意大利を以て最と爲す）。】

堪珍賞 珍賞に堪ふ

宜博得、鬱金堂裏人相傍⁽⁵⁾ 宜しく鬱金堂裏の人の相傍ふるを博し得

たるべし

翠紅春盎 翠紅 春盎たり

【當眉寫翠、對臉傳紅、唐鏡銘（「眉に當りては翠を寫き、臉に對ひては紅を傳く」唐鏡の銘）。】

與耳後珠璫 耳後の珠璫

星前鈿盒⁽⁷⁾ 星前の鈿盒と

盡錄珊瑚網⁽⁸⁾ 盡く珊瑚網に録す

濫別況 別況を濫ね

猶記去年江上 猶ほ記す去年の江上

淚與秋潮俱漲 淚は秋潮と俱に漲るを

欲題紅葉流波渺 紅葉に題せんと欲するも流波は渺にして

辜負樓頭凝望 樓頭の凝望に辜負す

休惆悵 惆悵たるを休む

暮地裏 暮地裏に

妝臺螭子風輕颺 妝臺の螭子 風に輕颺せらる

歸期不爽 歸期は爽はず

看擊出春蔥⁽⁹⁾ 春蔥を撃げ出すを看て

評量肥瘦 肥瘦を評量すれば

可是前時樣 是れ前時の様なるべし

邁陂塘【二枝鼈甲店に立ち寄り携帶用の鏡を買い、この一首の詞を作つて、鏡に入れる銘文の代わりとする。】

薄絹で念入りに拭きこむと、鏡は一輪の月のように清らかに輝いた。

以前、西歐に旅行をして購入したことがあるが、それと同じく丹精こ

めて仕上げられた名品である【鼈甲製品は、長崎以外ではイタリアが

最もよい】。大切に愛でるに足るものである。必ずや氣に入られ

て麗しい部屋にいる美人に攜帶されるであろう。これに映して翠の眉

墨を引き赤く頬紅をつけると、春の風情が溢れんばかりになる【「眉

に當りては翠を寫き、臉に對ひては紅を傳く」は唐代の鏡の銘文】。

眞珠の耳飾りと星前の螺鈿の箱とともに、珍品目錄に書き入れておく。

お別れた時のことを思い出すと、去年、江上の岸壁で、涙が漲る

秋の潮のように目に溢れたことを覚えています。唐の宮女に眞似て紅

葉に思いを書きとめ水流に乗せて送りとうございましたが波路はるか

で叶わず、また樓上からお歸りの姿をじっと目をこらして眺めても甲

斐がなく、もう悲しむのはよしにしました。急に化粧臺の上に蜘蛛が

風に軽く吹かれて吐いた絲とともに舞い上がりました。その吉兆どお

り、お歸りの時期が間違ひなくやってきました。お歸りになって、出

した私の指をご覧になり、瘦せたかどうか測つてくださると、きっと

前のままだとお氣付きでしょう。

(1) 白堅については高田時雄「李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景——」(『敦煌寫本研究年報』創刊號、京都大學人文科學研究所、二〇〇七年)に詳しい。

(2) 「邁陂塘」は詞牌名。「詞譜」卷三六は別名の「摸魚兒」として掲載する。本作の形式は『詞譜』に示す南宋の張炎の作に合う。この一首は前半が鼈甲の鏡に對する董康の思い、後半は鏡を贈られる妻を詠うと解釋した。

(3) 「鮫網」は鮫人(人魚)が織るという薄絹の布。

(4) 「留鴻雪」は、宋の蘇軾「和子由湓池懷舊(子由の湓池懷舊に和す)」詩(合注本卷三)に「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥。泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西(人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥。泥上偶然留指爪、雪泥を踏むに。泥上偶然に指爪を留むるも、鴻飛べば那んぞ復た東西を計らん)」に基づき、足跡をのこしたという意。本書卷一上・民國一六年一月十六日の注參照。

(5) 「鬱金堂」は鬱金の香りがたつ堂屋、美人の居室。唐の沈佺期「古意」詩に「盧家少婦鬱金堂、海燕雙棲玳瑁梁(盧家の少婦鬱金堂、海燕雙び棲む玳瑁の梁)」とある。「鬱金堂人」は美人をいう。

(6) 「傳」は原文「傳」。字形が近いことによる誤りと判斷して改めた。

(7) 「星前鈿盒」は未詳。何かの飾り、文様いうか。或いは七夕と關連するか。「鈿盒」は螺鈿飾りの蓋附きの箱。

(8) 「珊瑚網」は珊瑚を採る鐵の網、轉じて珍品を網羅することをいうが、ここでは書畫の名品を詳しく記録した明の汪何玉『珊瑚網』四十八卷を借り、珍品の目錄をいう。

(9) 「欲題紅葉流波渺」は、皇宮の水路から流れ出て來た「流水何太急、深宮盡日間。殷勤謝紅葉、好去到人間(流水何ぞ太だ急なる。深宮盡日間なり。殷勤に紅葉に謝す、好し去りて人間に到れ)」という詩の書かれた紅葉を男が拾い挙げ、後にその作者のもと宮女に出會ったという唐代の故事(『太平廣記』卷三五四引く『北夢瑣言』・『雲溪友議』卷下)による。

(10) 「蟾子」は蜘蛛の一種。晝に見ると瑞兆とされた(北齊の劉晝の『劉子』鄙名)。

(11) 「春蔥」は女性の細く伸びた白い指。唐の白居易「箏」(『白氏文集』卷六四)に「雙眸剪秋水、十指剝春蔥(雙眸秋水を剪り、十指春蔥を剝ぐ)」とある。

二十二日【陰曆臘八(十二月八日)】

晴れ。風は少し収まるが、波はまだ高い。須磨たちと客室で雑談し、

また手紙を書いて京都と東京の友人に送る。「孫」逸齋たちは何とか頑張つて食堂に行く。午後一時、吳淞江に入る。二時に滙山埠頭に到着。玉姫が息子と娘を連れて岸壁で出迎えてくれる。税關の検査を受けてから、「揚」无恙と別れ、自動車で歸宅。

書舶庸譚卷七終

